



ナンテン（南天）

冬になると真っ赤な実をつけるナンテンは、平安時代の末頃に中国から入ってきたといわれ、花は、6月頃にあまり目立たない白い小花を咲かせます。

ナンテンには、その実や葉に薬効があり、「災いを転じる」という意味の難転が南天に転訛したといわれています。そのため、縁起のいい庭木とされ、鬼門の方向に植えられたり、正月の床飾りの材料としても欠かせないものとなっています。

また、祝いごとの赤飯の上にナンテンの葉を添えるという風習は、「難転」という縁起のためと、葉に微量の青酸が含まれており、赤飯の腐敗を防ぐ効果があるためだそうです。

「南天のしげみに降りてつもらねば
くれなるの実は雪にぬれをり」

尾山 篤二郎